

週刊

教育資料

2017年8月21日号

No.1443

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

<http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

>>> 好評連載



校長講話【防災・地域への関心を高める】小川深雪／東京都文京区立林町小学校校長

教育問題法律相談【自立援助ホームとは】角南和子／弁護士

特別企画【どう進める？ 高校生の政治参加学習】



資料「高等学校通信教育の質の確保・向上方策について」
(審議のまとめ・概要)

◎広域通信制高等学校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議

▼マイオピニオン「改革を邪魔する方法と対策」

◎尾崎春樹／学校法人目白学園理事長

▼教育の危機管理「カリマネ」が悩ましい

◎石橋昌雄／立正大学社会福祉学部特任准教授・前公立小学校校長

▼潮流「社会の多様性理解するリテラシーを」

◎千葉偉才也／一般社団法人リテラシー・ラボ代表理事

千葉 偉才也

ちば・いざや◎川崎市出身。オーストラリアへ高校留学後、帰国し放送大学に入学。在学中から、教育分野政策担当秘書資格を取得し、国会議員政策秘書業務に従事。その後、早稲田大学大学院に入学し、公共経営修士を取得。主軸とした教育と政治。教育など人材育成を東北を中心に活動。



千葉偉才也氏に聞く

一般社団法人リテラシー・ラボ代表理事

潮流◆題字奥野誠亮

潮流

社会の多様性理解 するリテラシーを

価値観も文化も多様性が広がっている現代、
さまざまなトラブルを解決するには
社会を読み解き、多様な立場を理解できる
リテラシーを育てることが必要、という。

社会を読み解き、多様な立場を理解

—— 一般社団法人リテラシー・ラボの理念や主な活動内容について教えてください。

社会的なリテラシー能力の向上を目的に活動してきた社会教育団体で、2015年の末に一般社団法人となりました。社会の中で起こる様々なトラブルの背景には、個人から国家間までも含めて、「自分と他人の違いを見ない、認めない、互いにより良い形を作ろうとしない」というささいなことの積み重ねがあるのではないでしょう。社会にとって最善の道を見つかったり、社会の一員としての責任を果たす力を身に付けるためには、「社会を読み解き、多様な立場を理解する」ための「リテラシー」が必要です。

具体的には、映像教育を通じたメディア・リテラシーや政治リテラシー、ノーマライゼーションや国際交流、公共政策のコンサルティングなどの分野で活動をしています。政治や行政の実務者、教育や福祉などの公共政策に詳しいメンバー、アートや文化の担い手として活躍しているメンバー、まちづくりの実践者などが集まり、教育現場などにも出向いて、「多様な考え方を理解する力」「主体的な考えを発信する力」「社会を創り上げる力」という三つの力を育てる取り組みを進めています。

——社会教育団体という視点から教育に関わっていくというスタンスでしょうか。

私たちは、基本的に教育というものを、いわゆる学校教育だけではなく、広く社会全体から捉えていきたいと考えています。社会の中には子供たちの教育にとって価値のある「ホンモノ」がたくさんあります。こうした価値のあるものを学校現場につなげていく橋渡しの役割を果たして行きたいと考えています。

私たちは、社会における「リテラシー」を、多様性への理解と社会における責任能力を高めるモノサシの一つと考えています。自分達が暮らしている社会というものをきちんと認知し、主体的に「自分ごと」として関わっていくための能力を育成するための視点として捉えています。

——政治リテラシーの育成も、選挙権年齢の引き下げを契機に主権者教育の視点から注目されそうです。

主権者教育は重要ですが、当事者である高校2、3年生の年代になってからだけでなく、小さい時から、社会と自分の立ち位置について考える機会がもっとあってよいのではないかと思います。そのことが広い意味で、シチズンシップの教育につながると思うからです。例えば、模擬投票などの取り組みが高校現場などでも広がっていますが、投票の仕方などは一度、経験すれば分かるこ

とで、それよりは、「自分はなぜ投票に行くのか」「どうして政治参加をしていくことが必要なのか」をじっくりと考える機会が必要と感じます。幸い、大学入試改革では、知識中心の受験学力ではなく、思考力や表現力など、国際的なレベルで今の時代に求められている批判的な読解力や幅広い思考力につながる力が今後、ますます重要視されるようになりそうですので、学校教育もまた、社会とつながった学習の在り方が問われるようになるのではと期待しています。

映像制作を通して地域を再発見

——8月4日に、「としま映像教育プロジェクト」というイベントがありました。

今年で2回目ですが、豊島区と私たち、それに大正大学が連携して実施した映像教育のプロジェクトで、今回は豊島区内の四つの小学校の児童が、自分たちの地域で気付いたことを自分たちで取材・撮影して短編映画にまとめたものを上映しました（写真）。

子供たちだけでなく、担任の先生や保護者、制作をサポートした学生や大学の教員など、上映会に参加した大人たちも、子供たちの作品を通して、改めて自分たちの地域の良さに気付く場面もあったようです。

——作品づくりに参加した子供たちは、知らなかった地域や学校の歴史を「発見」

していました。

目白小学校の作品「めざせ！目白マスター」に取り組んだ児童は、馬に興味があって学校の向かいにある学習院大学の構内に馬場があると聞いて、「取材」をしたところ、実は自分たちの学校の敷地が昔、学習院大学の敷地で大きな馬場があったことを知って、驚いたことを映像作品にまとめていました。自分の興味を持ったことが出発点になって、地域に出掛けて、取材をしながら、自分たちの学校の歴史を知ることができたわけです。池袋駅近くの東京芸術劇場の施設の舞台裏などを取材した池袋小学



写真 「としま映像教育プロジェクト」での上映

校の児童たちの作品も、この土地が昔、師範学校の敷地であったことや、施設の設立にアートカルチャーの拠点となることを切望した若者たちの署名運動などがあったこと、また、普段は見ることもない舞台装置などを知る機会になるなど、子供目線で地域を「探検」して、驚いたことなどを映像作品にまとめていました。

——ご自身は国会議員の政策秘書など政治の分野での職業経験もされました。

7年間の国会での仕事を通じて、民主主義的な社会を創るためには、自分たちの代表である政治家を送り出している国民の側が、その市民（シチズン）としての資質や力量を高めていくことが重要ではないか、と考えました。民主主義の仕組みを考える、国民のレベル以上の政治家を求めることも本当はおかしな話だと思います。

ですから、政治の問題を突き詰めて考えると、結局は国民（市民）の教育の問題に行き着きます。政治を変えるのであれば、教育を立て直しながら、一人一人が民主主義社会の枠組みの中で、市民としての責任を果たし、自分ごととして社会に参画していく力を育てることが大切になっていると感じています。

他者を否定しない考え方を

——リテラシーの育成という視点で、メディアや政治のほかにノーマライゼーションや国際交流の活動も進めているのですか。

映像教育の分野やシチズンシップの教育、ノーマライゼーションや国際交流など、分野が異なっていますが、その基本となっているものは、自分とは異なる他者の存在や多様性を否定しないで受け止めていくという姿勢、と考えています。こうした考え方は、公共政策のコンサルティングの活動でも共通しています。単なるコンサルティングで終わらずに、今回の「としま映像教育プロジェクト」のように、映像作品づくりの現場でサポートしながら、上映会などを子供たちや保護者、先生方、教育委員会など行政関係者などと一緒になって、自らも楽しみながら参加していくことを重視しています。

全国の自治体はそれぞれ多様です。地域には歴史があり、伝統があり、そこに住む人々の思いなどもあります。ですから、コンサルティングというよりは、私たちも地域の人々と一緒に、寄り添いながらまちづくりを共に進めていくという姿勢です。

——いじめの問題なども他者を否定する気持ちで背景にあるかも知れません。そうですね。しかし、いじめの問題は単に当事者である子供たちの問題であるだけでなく、会社や地域社会、その他、さまざま

なところで、大人同士の関係の中にも、「いじめ」に近いものがあることの反映でもあると思います。

——学校との関わりについて考えていることは何でしょうか。

社会と自分とのつながりを考えるには、実際に社会の中で生きている大人との出会いも大切です。私たちの活動は、学校の外側の立場から、学校教育だけでは足りないリテラシー教育などの部分を補うという役割があると思っています。こうしたコンセプトを理解していただいた首長さんや学校の校長先生方の支えもあって、多忙な学校現場の先生方の負荷を減らしつつ、外部の人間からの刺激を受けるなど、相乗効果が出せる活動として受け止めていただきたいと思います。

今回の映像作品づくりでも、大正大学の映像制作を専門的に学ぶ学生さんや、大学の先生方のサポート、上映会での講評などを通して、担任の先生方が授業では見られない子供たちの頑張りや成長する姿を知る機会にもなりました。外部の専門家を学校教育で活用するというスタンスで、私たちのような外部の団体との連携を検討していただければ幸いです。

一般社団法人リテラシー・ラボ＝<http://www.literacy-lab.org/>